

フィールドワーク トピックス

第1回フィールドワーク 広島県・岡山県

「ホロコースト記念館」(広島県福山市)

館長である大塚信さんがアンネ・フランクさんの父親であるオットー・フランク氏に出会ったことを機に、ホロコーストに関する多くの史料を世界中から譲り受け、1995年に記念館を開館。これまで18万人以上が来館しています。

当日は広島県福山市にある盈進中学高等学校の「ヒューマンライツ部」の生徒が館内を案内してくれました。ホロコーストについて学んだだけでなく、今を生きる中高生が戦争と平和、人権についてどうとらえ、どんな想いで伝えているのかも知ることができました。



「長島愛生園歴史館」(岡山県瀬戸内市)

ハンセン病患者を隔離する施設として誕生した長島愛生園。現在は、ハンセン病回復者が生活する場として、またハンセン病の歴史や患者が受けてきた差別について学べる場として大きな役割を果た



しています。「子どものころから海外に興味があった私は、開発途上国の課題は勉強してきた。けれど、こんなに近くで起きていた悲しい歴史を今まで知らなかったことが恥ずかしい」。

これまで学んできたこと、そしてこれからの自身の行動について、参加教員は真剣に考えていました。



第2回フィールドワーク 島根県出雲市

「塩冶地区放課後子ども教室」のイベントに参加

外国人労働者の多い島根県出雲市は、外国につながる子どものサポートも先駆的で、産官学が連携して事業を展開しています。市内でも特に外国につながる児童の多い出雲市塩冶地区を訪問、「塩冶地区放課後子ども教室運営委員会」が主宰する月1回のイベントに参加しました。イベント終了後には運営スタッフの方から、地域の小学校で週に複数回実施している「放課後子ども教室」についての概要や活動内容、課題などを伺いました。



出雲市教育委員会主宰の「日本語初期集中教室」を訪問

出雲市に転入した外国につながる子どもは、在籍校に通学するまでの約1か月、日本の文化・習慣や日常に必要な最低限の日本語を学ぶため「日本語初期集中教室」で学びます。実際に子どもたちが通う教室で、教育委員会の方から制度やプログラムなどをお聞きしました。



「MANABIYA」の取組みを聞く

外国にルーツを持つ青少年をサポートする「MANABIYA」。支援の対象外になりがちな10代後半の子どもに寄り添い、地域社会と接点を持つイベントの実施や同世代同士のつながりを作る働きかけをしています。主宰者の河原由実さんからお話を伺い、参加教員からは「学校ができることは実は小さいのではないかと謙虚にふり返ることができた」「教室外でも子どもが地域で輝き、居場所が探せるように教員も意識する必要がある」といった感想が上がりました。



第3回フィールドワーク 広島県東広島市

日本語教室「にほんごわいわい八本松」を見学

東広島市は多文化共生に先駆的に取り組み、「学生や外国人が定着し、活躍するまち」を目標にかけ、2020年度「SDGs未来都市」に選定されました。東広島市が行うこの教室には、小中学生、高校進学を目指す10代男性から社会人まで、またルーツを持つ国も中国、ブラジル、ベトナムと幅広い方が参加されていました。

日本語教室終了後、運営に携わっている奥村玲子さんから東広島市の多文化共生についてお聞きしました。



「広島イスラーム文化センター」を訪問

イスラム教徒だけでなく、誰でも立ち寄ることができる地域に根差した同センターは、男女別の礼拝部屋や資料室、居室などから成っています。館内を見学したあと、設立者であるシリア出身のアブドゥーラ・バセムさんからイスラム教や広島に暮らすイスラム教徒の生活について教えて頂きました。

